

2026 AUTOBACS SUPER GT Round7 AUTOPOLIS GT 3Hours RACE

apr GR86 GT



apr

Racing Constructor



2026 AUTOBACS SUPER GT Round7 AUTOPOLIS GT 3Hours RACE

開催地：オートポリス（大分県）／4.674km

10月17日（予選）

天候：晴れ コースコンディション：ドライ 観客数：12,000人

10月18日（決勝）

天候：晴れ コースコンディション：ドライ 観客数：18,000人



SCの巡り合わせで勝負権を失うも、もてぎ2連戦への手応えをつかむ

昨今の中東情勢に鑑み、第3戦マレーシア大会が2027年以降に延期され、その代替として最終戦もてぎ大会が2連戦となった。そのため、第7戦オートポリスは“6戦目”としての開催となる。

大分県の実験場に位置するオートポリスは、大小のコーナーが連続するうえ、アップダウンも激しい。追い抜きが難しく、接触のリスクもつきまとう。コースが長いぶん、セットアップとタイヤの出来がラップタイムに直結し、クルマ作りの精度が問われる一戦だ。

今大会は2回の給油が義務付けられた3時間レース。長丁場となるぶん、ピット作業の早さと正確さ、そしてドライバー交代を含めた戦略の巧拙が勝敗を分ける。30号車 apr GR86 GTはレギュラードライバーの永井宏明、平良響に加え、第3ドライバーに織戸学を登録。経験豊富なベテランを加えた3人体制で、長いレースを戦い抜く。

公式練習／21位 10月17日（土）10:30～12:04

公式練習開始時の気温は21℃、路面温度は23℃。秋晴れの下、レースウィーク最初のセッションがスタートした。

30号車は平良がステアリングを握りコースイン。前戦のクラッシュにより車両を修復していたことから、まずはアウトラップからすぐにピットへ戻り、さらに5周目にもピットインして車両をチェックしつつ、持ち込みのタイヤとセットアップを確認した。その後、GT300車両がトラブルによりストップしたことで赤旗が掲示される。再開後の8周目に平良は1分45秒924を記録し、翌周ピットに入った。

そこからは永井に代わり、確認作業を再開。11時30分からのFCY(フルコースイエロー)練習の時間帯には再び平良がコースインし、ふたりでセッティングのアジャストと確認を繰り返していった。11時45分から10分間のGT300専有走行では、永井が予選シミュレーションを担当している。

リザルトは8周目の平良のタイムから更新できず、21位という結果に。だが、これはタイヤの温度レンジが路面温度に適していなかったことが理由であり、予選に向けたセッティングを見つけ、手応えを感じることができた公式練習だった。なお、12時15分から12時35分のサーキットサファリの時間帯には、織戸が走行して最終確認を行った。



<公式予選>

公式予選 10月17日（土）

Q1 A／2位 14:30～14:40

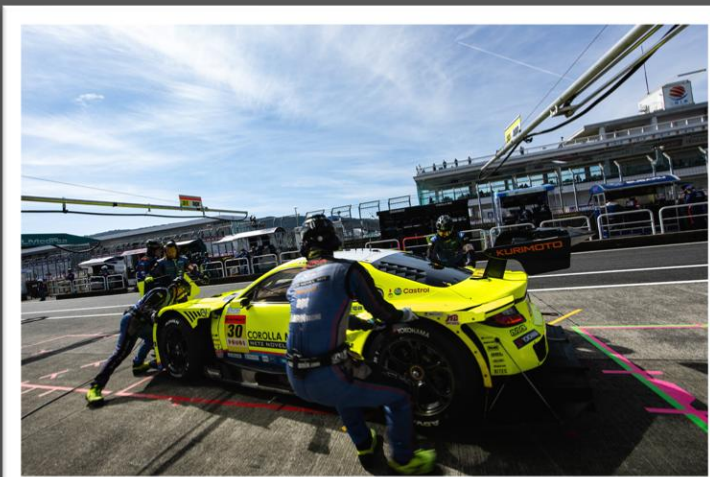
Q2／18位 15:23～15:33

予選開始時のコンディションは気温23℃、路面温度は29℃。午前中の公式練習ではタイヤの温度レンジが路面温度に合わなかった30号車だが、チームが持ち込んだタイヤに適した温度レンジまで路面温度が上昇していた。

30号車はQ1 A組に出走、アタッカーは平良だ。アウトラップを含む3周でじっくりとタイヤを温め、4周目にアタックに入る。タイムは1分44秒179。公式練習のベストから1秒以上も縮める好タイムで、2番手につけてQ2進出を果たした。トップとのタイム差はわずか0.057秒だった。

Q2は永井が担当。永井も同様に3周のウォームアップを経て4周目にアタックした。タイムは1分45秒850で、アタック直後には6番手につけていたが、その後ライバルがタイムを更新していき、結果は18番手となった。

それでも、決勝は2回の給油が義務付けられた3時間レース。レース展開次第でチャンスは十分にある。レギュラードライバー2名に加え、第3ドライバーの織戸も控える3人体制で、上位進出を目指す。





永井宏明選手

「公式練習のときは、タイヤのグリップ感がすごく薄かったのですが、セッティングに少しずつ手を加えていって、予選にはかなり良い状態で臨むことができました。実際、僕が担当したQ2でもクルマは決まっていたのですが、僕自身がうまくまとめられず、攻めきれなかったり逆に攻め過ぎたりとミスがありました。燃料満タンで走る決勝では、予選と同じようなフィーリングで走ることはできないと思いますが、タイヤは決勝向きを選んでいるので、コンスタントにラップできれば追い上げていけると 생각합니다」



平良 響選手

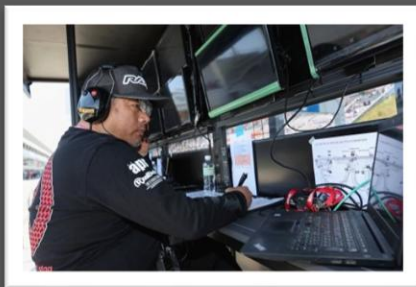
「公式練習では持ち込んだタイヤの温度レンジがマッチしていなくてうまく発動していませんでしたが、午後の予選になれば気温も上がって絶対良くなるのは分かっていた。Q1はセクター1から非常にフィーリングが良くて、これはいけるという手応えがありました。セクター2でちょっとタイムを失ってしまいトップ通過はできませんでしたが、前後ともトラフィックがなく、良いアタックができたと思います。公式練習ではユーズドタイヤで走ったときの感触も良かったので、決勝も良い状態で走れると思います」



織戸 学選手

「僕はサーキットサファリの時間帯だけ走行しました。公式練習での永井選手と平良選手のコメントから、朝の走り始めは温度が低くてタイヤが合っていないんだなという雰囲気を感じていましたが、そこからセッティングをアジャストしていったら、気温もちょっと上がって、サーキットサファリでのクルマの感触は悪くない状態でした。気温が上がるにつれてタイヤが適正な動作温度域に入ることを確認できたので、明日午後の決勝も良い走りができると思います」

金曽裕人監督



「まずは前戦のクラッシュから、車両をしっかりと修復してくれたチームのみんなに感謝ですね。公式練習ではそのことを確認できて、タイヤの温度レンジ的にタイムは良くありませんでしたが、セットアップのバランスが良いことも確認できました。予選に向けて、パーフェクトだったと思います。公式練習ではロングランのアベレージも速いタイムで走れているので、決勝に対する不安要素はありません。あとは、運や流れをどうつかむか、ですね」

決勝レース（93周）／19位 10月18日（日）13:16～16:18

決勝日も快晴、気温25℃、路面温度33℃というコンディションで、3時間レースの幕が切られた。

30号車のスタートドライバーは織戸。前車がトラブルによりピットスタートとなったことで17番手となったが、中団からのスタートは混乱が起きやすいポジションであり、ベテランの技に託した。オープニングラップではランキング2位の車両に迫られ、地力に勝る相手に無理はせず先行させるが、その後は前車の背後にピタリと張り付き、安定したラップを重ねていく。21周目にはトラブルでストップした車両が出たためセーフティカー(SC)が導入され、再開後にはピットに向かう車両も増えるなか、織戸は1時間超の第1スティントを走りきり、8番手を走行する35周目に1回目のピットへ向かった。

チームは給油とタイヤ交換を行い、永井をコースに送り出す。戻ったときは25番手だった。第2スティントは持ち込みセットの関係で違うスベックのタイヤを履いたこともあり、ピックアップにも悩まされてペースを上げられない。46周目にはGT300車両のクラッシュで2回目のSCが導入されるなど波乱の展開のなか、永井はポジションをキープし、ショートスティントの戦略で53周目に2回目のピットに入った。

ここでも給油とタイヤを交換し、平良にバトンを渡す。SC導入とピットのタイミングが合わず、26番手に後退。勝負権を失ってしまった30号車は方針を転換。次戦に向けたタイヤ選択とセットアップの確認のため、ときにはバックオフして速い車両を先行させ、データ収集に専念した。結果は19位に終わったが、プッシュしたときのラップタイムは上位と遜色なく、次戦への手応えをつかむことができた。

なお、決勝日の翌日、織戸が今シーズン限りでのスーパーGT引退を表明。永井の計らいもあり、もてぎでの土曜日第3戦と日曜日第8戦では、織戸／平良のコンビで臨むことになった。ここで得たデータを糧に、30号車はチーム一丸となって最後の舞台に臨む。





永井宏明選手

「僕が担当した第2スティントは、予選やほかのスティントとは違うスペックのタイヤを使いました。温度レンジとしてはほぼ同じなのですが、少し柔らかめのタイヤです。それがそのときの路面コンディションに合っていなかったようで、一度ピックアップを拾うと取れない状況が続いてしまい、なかなかペースを上げることができませんでした。残念ではありますが、いまのスーパーGTはタイヤ選択がパフォーマンスに直結することをあらためて確認できたので、今後につなげていきたいと思います」



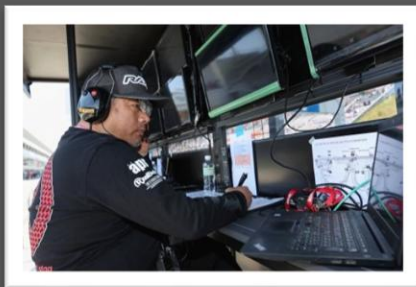
平良 響選手

「第3スティントで履いたタイヤは、すごく良かったです。ペースも安定して速かったのですが、入賞には届かないポジションだったため、次戦につなげる走りをすることに気持ちを切り替えました。ここまで進めてきたセッティングが正しかったことを確認でき、もてぎで選ぶタイヤにおいても良いデータを取ることができました。反省点としては、ピットのタイミングも含めた戦略面ですね。波乱のレース展開のなかで、一時は同じようなポジションを走っていたライバルのなかでも順位を大きく上げたチームと、大きく下げたチームもありました。なにが正解だったのかを整理して、もてぎに挑みたいと思います」



織戸 学選手

「オープニングラップで1台に抜かれてしまいましたが、そこからは前の集団についていくことができました。昨年のオートポリスはタイヤがすぐに消耗してしまいましたが、今年は僕のスティントの終盤まで、ヨコハマタイヤの状態は良好でした。クルマのセッティングも路面コンディションにマッチしていましたね。平良選手のスティントでは、下がって、プッシュしてというのをテストしていて、プッシュしたときのラップタイムはとても速かったですね。今後に向けて、良いデータが取れたと思います」



金曽裕人監督

「第2スティントの永井選手には、タイヤの選択で苦労をかけてしまいましたが、全体的にはタイヤもクルマのバランスも良く、ポテンシャルはありました。SC導入のタイミングが悪くて周回遅れになってしまったのが致命的でしたね。それがなければ、面白い結果になっていたと思います。勝負権がなくなってしまった平良選手のスティントでは、今回の持ち込みセッティングと、次戦に向けたバランスを確認する走りに徹してもらいました。一所懸命走ってくれて、その目的を果たせたので、もてぎ土日曜日の2戦に活かします」